

海外生活を体験して (雑感)

矢沢和人*

私は1994年7月より1996年6月まで米国バンダービルド大学に留学する機会を安孫子保教授より頂き、その間危険な目に遭うこともなく五体満足で帰国致しました。

まず留学した地域についてお話しします。私のいたところはテネシー州の州都、ナッシュビルです。多くの日本人にとって、テネシーワルツ、カントリーミュージック、そしてウイスキーのジャックダニエルでその名を聞く程度ではないでしょうか。テネシー州と聞いてどこにあるのか判る方はほとんどいないと思うので、まず場所をお話ししなければなりません。アメリカ合衆国の地図を思い浮かべて下さい。真ん中を流れるのがミシシッピ川、それより東にアパラチア山脈がありますね。その間の真ん中にテネシー州があります。さらに付け加えると昨年オリンピックが開催されたジョージア州のアトランタから北へ向かって約500キロほどにナッシュビルはあります。ここは南部に入ります。私は南部というとジョージア州以南と思っていた程度しか認識がありませんでしたが、実は

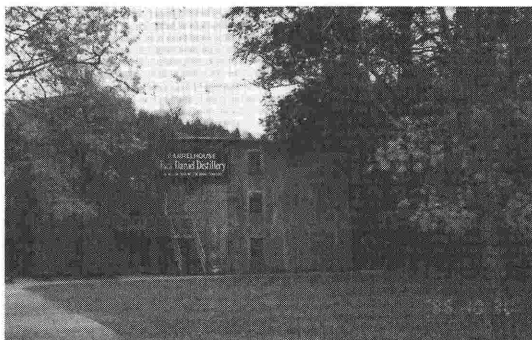
テネシー州の北隣のケンタッキー州より南は南部なのです。

ナッシュビルの気候は日本と同じく四季があり過ごしやすい所です。また人口50万程度なので程々都会でもあるし、田舎でもあるというところでしょうか。住民は白人系(ホワイトアメリカン)が多く、黒人系(ブラックアメリカン)は少数派です。これは歴史的に何が都市の基幹産業であったかによるそうです。昔、ナッシュビルは印刷業が盛んであったのがこの比率の大きな原因といわれています。それに対して同じテネシー州のメンフィスは綿花産業が盛んであったため、黒人がとても多いそうです。歴史をひもとくと都市の人種構成の違いが判るのもアメリカらしいところでしょうか。

次に私がアメリカにいて感じた事、思った事をほんのごく一部ですがお話し致します。

①企業に勤めるのなら、アメリカは日本以上に学歴社会です。この言葉に驚いた人もいるかもしれませんが、「アメリカンドリームという言葉があるのではないですか」とおっしゃる方もいると思います。でも考えてみてください。夢を現実のものとする可能性は確かにあります。秀吉の様に天下を取る事も不可能ではありません。しかしとても希な事である事は言待ちません。希ゆえアメリカンドリームを達成した勝者は賞賛されるのです。

ではなぜ学歴社会かという、これはアメリカは移民の国だからだと思っています。多くの人は国を捨て、新たな可能性を求めてこの国に決死の覚悟で来た人達です。その中で人と如何に違うのか、どれだけの事が出来るのかを人に知らしめるためには目に見える物が大切なのです。その為には「肩書き」です。ですから収入をより多く得る為にも社会でのし上がっていく為にも学歴が必



ジャックダニエルの蒸留工場

*旭川医科大学薬理学講座

要なのです。企業に勤める時、修士や博士を持っているとそれだけで事務職ではなく管理職として採用されます。最近日本の経営思想を取り入れたとはいえ、事務職から管理職になりそして生き残るには大きな壁が今でもあります。

大学院の選択ですが日本と違い、卒業した大学の大学院に行くことはまずありません。もしそうなら積極的な性格ではない、とみなされる事が多いそうです。どこでもやっていける事を周りに示すと共に、大学院時代にいろいろな人に会って人間関係をつくり、これらを一つの基盤としてさらに伸びていこうとするのが大切だそうです。

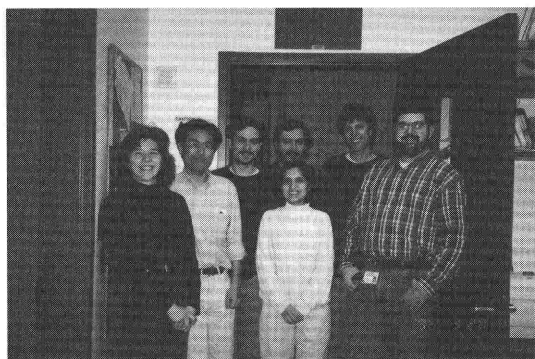
これも日本と違う事ですが、大学卒業後すぐ大学院に入る学生さんの他に少し社会で働き、お金を貯めてから大学院に入学する人達もいます。三十代の大学院生も少なくありません。これも「肩書き」が生きていく為に重要だからです。大学院の間は、時間を払って将来の収入を得るといふ、お金の先行投資の期間とでもいえると思います。もちろんすべての大学院生がそう考えている訳ではありませんが、近年その傾向が強くなりつつあるそうです。学位を取ったら大学にいるより企業へ行くことが主流です。なにしろ収入が2倍ほど違うのですから。これは日本と同じ様ですね。日本人はお金の事をいうと、卑賤な奴、品のない奴と後ろ指を指されますが、アメリカ人にとっては「お金こそその人の能力を示す指標である」という考え方があります。ですから彼らの会話を聞いてみると“money, money”と言う単語が山ほど出てきます。お金の事を話すのはとても重要な事な

のです。アメリカではもちろん職場に対する愛着、誇りを持って働いている人達は多くいます。独身時代はお金が少なくても、興味のある仕事で職場の雰囲気がよければがんばって働きもするでしょう。しかし、家族を持った時いくら自分が快適な職場でも収入が少なく、似た様な別の会社でこちらの方が給料が多ければ転職しないのは家族に対する裏切り行為となりうるのです。

この様な考え方があると同時に、家族を犠牲にしてまでも地位やお金を得る必要はない、と考える生き方も許されています。アメリカの例を挙げると、「私は博士を持っていますが家族の事を考えると上昇志向を持つことよりも、夕方には家に帰り可愛い妻や子ども達と一緒に居たいのでそれが満たされるような仕事を選びました」という生き方を社会が認めています。さらに具体的な例をあげると、昔阪神タイガースにいたランディ・バースの例がわかりやすいと思います。子供が病気なのだから少しでも近くに居てやりたい、その為には野球(仕事)など何ほどのものかという感じで帰国したと記憶しています。

②アメリカは指揮系統がはっきりしており、各人の責任範囲が明確です。ですから確かな判断のできる人間が組織の上にたち、正しい決定をすれば組織の下部に程々の人達がいても物事がうまく進みます。各々一芸に秀でている人を適所に配分すれば組織として成り立ちます。アメリカンフットボールを皆さん、考えてみて下さい。あれこそアメリカ人の考え方を示している典型です。攻撃と防御の度に選手を入れ替えるだけではなく、ブロックのみをおこなう人やボールを受け取るだけに走る人、そしてボールを蹴るだけの人というように、仕事が細かいところまで分担されています。各人如何に自分の仕事だけをしっかりとこなす事が求められているかという例としてわかりやすいかと思います。アメリカの良い点は、何か出来たら最低限食べていけるし、人も認めてくれるということがあげられます。もちろんこれは両刃の剣で、自分のやってる事以外を新たに勉強しようとする向学心をもたず、またあえて無理をしない、という人達も数多くいます。その理由として、あれこれと裁判を起こす社会なので、責任をとりたくないという面もあるかと思えます。

それに対して日本は何でも一応は知っておかな



バンダービルド大学での私の友人達
(筆者は左より2人目)

いと、なかなか組織内での生き残りは難しいかもしれません。確かに能率は良くはないでしょうが、いろいろな部署または部門を知っておく事は実験としてその効率が変わると同時に、そこで働いている人の気持ちがわかる、という利点が挙げられます。農耕社会という歴史的背景をもつ日本では、組織及びその構成員と如何につき合っていくか、という事がかなり重要な位置をしめるのではないのでしょうか。良いかどうかは意見の分かれるところかもしれませんが、わが国はお互い出来る範囲で助け合っていこうとする一面を持っている社会といえるのかもしれませんが。

③表現の自由と責任について感じたのは日本のマスコミがフィルターをかけて、日本人が持っているアメリカの「自由」というイメージに添う事だけ、増幅させて伝えていると言う事です。アメリカは子どもを性的な情報および暴力の影響から守ろうとしています。テレビでは映画や劇の始まる前に“必ず”「以下の番組の内容は、汚い言葉がでてくるか、性的描写はあるのか、暴力の場面はどうか、そしてそれらの程度はどれくらいなのか」を示します。チャンネル権をもつ親に警告を発し、親の責任で子どもにテレビ番組をみせるのです。また50チャンネルぐらいある衛星放送では性的描写のある番組でも nipple は出しません。どうしても観たければテレビ局に電話をして数ドル別に払えば特別な番組を観る事は出来ます。もちろん本屋へいっても同様です。nipple がでている物は全てビニールの中にあります。日本の週刊誌をアメリカでも手に入れる事は可能ですが、我々男性陣がわくわくするようなページは場面によって切り取られているかビニールの中です。アメリカでは簡単に子どもが性的な描写にふれられないようにしています。それに比べて日本は野放し状態です。

また暴力的な場面のある子供向け番組についてもアメリカでは厳しい意見があります。たとえば日本からアイデアを輸入して、俳優だけホワイトアメリカンとブラックアメリカンになった「何々レンジャー」というものが子供達のなかでも大流行です。おもちゃ屋さんでもキャラクター商品としてこれらは人気があります。しかし保育所、幼稚園及び小学校から「この様な暴力的な番組は子供に見せないで下さい。」と通達が親にくるので。皆さん、信じられますか？これが皆さんの知らないアメリカの現実なのです。

お酒についても州によって年齢に差はありますが、法律で決められている年齢より年少者にお酒を売ると、売った人が処罰されます。ですからアメリカに居た方、旅行された方はご存じでしょうが、アルコールを扱うところに入る時は必ず身分証明書の提示を求められたはずで。

この様な事をどれだけの日本人が知っているでしょうか。情報は操作されて我々に伝えられています。我々の持っている「自由」というアメリカのイメージと異なる事は、そして三面記事的に面白くない事は、フィルターをかけられカットされているのです。

話はつきませんが、見ると聞くとは大違いという例をごくごくわずかですが書きました。研究に対しても、時にこれらのような事がいえるのではないのでしょうか。もちろん作業仮説は必要ですが、実験をしなければ、自分自身のデータをとってみなければいけない事もあると思います。

海外に出てみて肌身で色々感じる事が出来ました。この様な機会をいただいた事を感謝すると共に、最後に私を支えていただいた諸先生方に心から御礼を述べてペンを置きたいと思います。どうもありがとうございました。